



ボニージュ街に行くのは久しぶりだった。シユヌベル大学へ続く坂の下には、新旧様々な本を商う店が集まっている。大方は間口が狭い小さな店だが、意外と奥行きはあり、天井まで届く壁一面の棚に本が詰まっている。

置かれているのは、紙に印刷された書物とは限らない。黄ばんだ羊皮紙に書かれた写本、広げれば何十イート（一イートは約三十センチ）もありそうな巻物、中には薄い粘土板や木の板に無数の引つ掻き傷のような文字が刻まれたものまで扱う店もある。新刊本を売る店もあるが、大抵は古書古文書が中心で、客はほとんどがシユヌベル大学の学者と学生だった。

私は親の金を持って逐電した学生の行方を突き止めるという仕事を終えた帰りだった。学生は馴染みになった飲み屋の女と逃げるのだと言った。両親のすすめる結婚相手も仕事も気に入らないようだった。私は持ち逃げした親の金を―彼は渋ったが―八割方返してもらい、後は好きにしろと言って仕事を終わりにした。

小雨が降っていた。石畳の細い道を歩くと、濁った赤や朱色の落葉が沓の裏に張り付くような気がした。今夜は少し冷えるかもしれない。

ジェリーフォルという男と出会ったのは、史書を中心に扱う小さな店の中だった。黴臭い古書が山と積まれ、すれ違うのも難しい店の奥で、その男は店主と話をしていた。

「これは掘り出し物だよ、先生。ほら、ここのところだよ。この裏表紙の押形、この二重の花形紋はトロイズ家の家紋だ。つまり、こいつは三代前のトロイズ子爵がスプルナーの死霊を呼び出して注釈させたあの『古都礼賛』なんだよ」

腰の曲がった店主は、のび過ぎた髪の下で小さな目をきよときよと動かしていた。店主の前では丸眼鏡をかけた小太りの男が手にした小振りの本を矯めつ眇めつ眺めていた。黄土色の地味な外套を着て、薄灰色の手袋をしている。髭をきれいに剃り、白いものが交じり始めた髪を油でなでつけている。

「うむ、だが、どうもこの筆跡が幾らか新し過ぎるようにも見えるんだが……」

男は少し弛んだ頬に手をやって首をひねった。

「先生、トトロイズ子爵は新しいもの好きでも有名だったろう。だから流行りの書体を使ってるんだよ。この頃、新ベルチッカ流つてのが興った時代だろう」

「うむ、新ベルチッカ流か……」

先生と呼ばれた男は外套の隠しから財布を取り出した。私は男の横で独り言のように呟いてみた。

「新ベルチッカ流に肩入れしたのは三代目の甥のトトロイズの方だろう。少しばかり時代がずれてないかね」

黄土色の外套の男はこちらを見た。丸眼鏡の奥で薄茶色の丸い目が、呆気にとられたように見開かれていた。

「ふむ、そうか、小トトロイズのことを忘れていた」

男はまだ未練が残るように、手にした本を二度三度ひっくり返しては見ているが、その内納得したようで、本を棚に戻した。

店主はむっとした様子で上目遣いで私を睨んだ。

「旦那、商売の邪魔をするんなら出ていってしましましょうか」

「言われずとも。この店の本の真贋を確かめていたら、夜が明けてしまいうさだからね」

店主は一言二言罵詈を吐くと、黄土色の外套の男の説得にとりかかった。私は店を出て、冷たい小雨が降る街路を歩き出した。

しばらく行くと、後ろから呼び止める声があった。

「君、待ってくれんかね。君、本屋では世話になった。礼を言わせてくれ」  
振り向くと黄土色の外套の男がいた。丸眼鏡に細かな雨の滴がついていた。

「お陰で無駄な買い物をしなくてすんだよ。ありがとう。どうもあの店は胡散臭いとは思っていたんだが、書法の知識はあまりなくてね。危うく騙されるところだった」

四十過ぎに見えたが、曖昧な笑みが妙に若々しく感じられた。学究肌の男なのだろう。学者かどうかはわからない。あの店の主は誰彼かまわず先生と呼ぶのだ。

「あの店はたまに本当の掘り出し物もあるけどね、怪しげなものを高く売りつけることもある。気をつけることだね」

私はそれだけ言って立ち去ろうとした。雨が強くなってきそうだった。男がもう一度声をかけてきた。

「君、待ってくれ。できれば、少し話がしたいんだ。『古都礼賛』やトトロイズ子爵について知っている人間なんて、滅多にお目にかかれるものじゃない。君、君はメノムアーチェについて、何か知っていないか」

私はもう一度振り向いて、男の顔を見た。濡れた眼鏡の硝子の中に、いくらかさがるような色合いの目が見えた。出来の悪い学生の相手をした後だったので、私は少しそういう話がしたい気分だったのだろう。

「夢の街」をお探しかね。この背徳の街で行く道が見つかると思えないが」

小太りの男はうれしそうに笑みを浮かべた。引越して初めて友だちのできた子どものように見えた。

私たちはボニージュ街と放校通りの間あたりにある〈澄める水〉という

店に入った。名前ほどきれいな店というわけでもなかったが、静かで清々しい気配があった。まだ時間が早く、客は私たちだけだったからだろうか。

男はジェリーフォルと名乗った。私はスナブ・ランケンという名前を告げた。ジェリーフォルは少し驚いたような顔をした。

「いや、これは今日は幸運の日だ。魔道探偵として高名なお人にお目にかかれるとは」

私はお決まりの答えを返しておいた。

「勘違いされても困るから、言っておこう。僕は魔術の使い手ではない。化け物怪しものも魑魅魍魎を特段好んでいるわけでもない。なぜだか、そういう手合とかかわる事件が多いというそれだけの話だ」

ジェリーフォルはそれでも幾らか高揚した様子を隠そうとしなかった。私は正直に名前を告げたことをいささか後悔した。

私はデイコンを、ジェリーフォルは葡萄酒を何杯か飲み、話をした。

眼鏡の男はシュヌベル大学の図書館で働いていると言った。膨大な蔵書の整理と補修などが仕事で、学者というわけではないが、仕事の傍ら、メノムアーチェという都について調べていると言った。幾らかサンジェリーの歴史に興味を持っている者なら、聞いたことのあるはずの街の名前だった。

メノムアーチェは〈夢の街〉、あるいは〈幻の都〉と言われる古の都邑だった。三千年の昔、背徳の都シエラドゥーアが〈大いなる厄災〉により滅んだ後、同じくこの地に興り、ごくわずかの間栄えた麗しの都。豊かな緑に包まれた芳醇の街、平和と安寧の夢見る都、そぼ降る雨に煙る街、〈夢の街〉メノムアーチェ。

「〈夢の街〉が本当に実在したと思っっているのかい」

私の問いにジェリーフォルは手にした杯を二三度振って笑みを返した。

「もちろんだとも。ああ、君も大学の教授連中同様の考えなんだね。まあ、

仕方がないさ。遺物が掘り出されたことはないし、メノムアーチェについて直接記された本は『翠緑の書』だけだからね。しかもこの本はあの、何でもあるはずの図書館にはないときている」

笑いは、彼の〈夢の街〉に対する信念が非常に固いものであることを示しているのだろう。史学者の中でメノムアーチェの実在を信じるものはほとんどいない。幾つかの古謡に歌われた朧な伝説の街、ごくわずかな部数が現存するらしい『翠緑の書』は、数百年前の好事家、あるいは妄想に駆られた人間が拵えた偽書であるというのが定説だった。

トトロイズ子爵の『古都礼賛』には、『翠緑の書』からの引用がある。ジェリーフォルはすでに一部所有していたが、死霊の言葉による注釈に魅かれて買おうとしたと言った。

「僕が〈夢の街〉について、君以上に知っていることは多分ない。本当にあったと信じているわけではないけど、幻だと断定することもできない」  
「賢明な態度だね、スナブ・ランケン。そう簡単に古の事物について断定することは避けるべきだと私も思うんだよ」

それから、しばらくジェリーフォルはメノムアーチェの実在についての自説を披露してくれた。首肯ける部分もそうでない部分もあった。

「僕は『翠緑の書』の実物を見たことはないが、『古都礼賛』の引用文が正しいのなら、いささか疑わしいものがあるんじゃないか。文章がつまり文体と書法のことだが、奇妙に新しい雰囲気がある。二千年前のものにしては、という意味だね」

ジェリーフォルは『古都礼賛』での引用はその時代には存在した比較的新しい写本からのものだという説で反論した。アラガータ写本という今は失われた断片的文書をトトロイズ子爵は所有していたのだと言う。

私たちは誰も本当のことは知らない〈幻の街〉について、議論を続けた。

緑玉の王座、輝く虹色の石作りの家々、百年統治し続けたという名無しの王、神託によって王をも動かしたという〈緑の巫女〉、『翠緑の書』にも明

記されていないという謎めいた滅亡……。

〈澄める水〉に客が増えてきた頃、私たちは店を出た。雨は止んでいた。次に会う約束などはしなかった。

次にジェリーフォルと会ったのは、色づいた木々の葉が、半分ほどもなくなつた頃だった。私はポニージュ街の奥にある春本屋で、さる商家の娘が戯れに描かせた裸体画の買い戻しという仕事を済ませた。春本屋は絵を銅版画にして売ろうとしていたが、出来の悪い版画より、商家の主が示した金貨の方が気に入つたようだった。

絵の包みを持って古書店街の細い路地を辿っていると、すぐ前の店から見覚えのある黄土色の外套姿が現れた。書物らしい紙包みを大事そうに小脇に抱えて、誰かに見咎められるのを恐れるかのようにあたりを見回した。

小太りの男は私の姿を認めると、驚いた顔をして、すぐに笑いかけた。

「おお、こんな時に会うなんて、何ていう偶然なんだ」

「いい買い物をしたのかい」

ジェリーフォルは抱えた包みに目を落とすと、妙に小声になつた。春本でも買ったのかと思つたが、彼の出で古き佇まいの店の店頭には、ケイラー版の『サンジェリイ市史』や『東エスカールに於ける狩猟民の暮らしと説話』といった本が並んでいた。灰色の大きな猫が陳列台の上で欠伸をしていた。

「とんでもない買い物なんだ。『翠緑の書』だ。あの本を手に入れたんだ」

声を潜めてジェリーフォルはそう言った。

「まさか、本当に手に入るなんて思わなかった。しかも、店主はよく価値がわかっていなかった。これこそ掘り出し物だよ」

丸眼鏡の男は小脇に抱えた荷物を薄灰色の手袋をした手で愛おしそう

に撫でた。

私たちは開いたばかりの〈澄める水〉に入り、隅の方の席に座つた。私はアイコンを、ジェリーフォルは葡萄酒を注文した。

『翠緑の書』に乾杯だ」

ジェリーフォルは葡萄酒を一口飲むと、こぼさないように慎重に卓子の奥に置き、それから包みを開いた。かすかに黴臭いにおいがした。薄茶色の包み紙の中から現れたのは、同じような色のついたぼろぼろの紙の束とでもいうべきものだった。縦が一メートル弱、幅がその三分の二ほど、厚手の紙に活字なのか木版なのか、ウォモレン（共通語）らしき文字が並んでいる。表紙も裏表紙も失われていたが、扉にかりうじて『翠緑の書』という飾り文字が読めた。著者の名前は破れてしまつた扉の下半分に記してあつたのだろうか。全体にかなりの脱落があるようだった。

ジェリーフォルは震える手で頁をめくり、何度も首肯き、ひとりごちた。

「ログラフの古謡に歌われたことは本当だつたんだ。〈大いなる厄災〉から人々が立ち上がり、新たに築いた清涼たる都、虹色の艶やかな石の都、緑の木々と美しい花々に彩られた街……おお、ここは大分欠落があるな。ランケン、見てくれ、ここに百年統治したという王の名前が……うん、これは読めないな。ここからが巫女の神託についての記述だろう……名はツェン、いやツェーヌと読むべきか。神のお告げにより、王が政を行つていたんだ。神は……ランケン、これはどう解釈するべきなんだろう。〈失われた神々〉のことなのか、オラベディア座の彼方の〈光る神々〉を指すのか……」

本は確かに古いものに見えた。だが、古い本ならポニージュ街には幾らでもある。この世に数部しか存在しないとされる『翠緑の書』が、運良く〈夢の街〉を追い求める男のもとに現れたのだろうか。

古い歌によれば、メノムアーチェが栄えたのは三千年近くも昔のこと

だった。『翠緑の書』の成立がいつの頃とされているのか、私は知らなかったが、ウオモレンらしき文字で記されていることからすれば、相当に後代の写本なのだろうか。疑問は幾らでも言い立てることができそうだったが、私は取りあえず何も言わなかった。

「ふむ、最後の方は随分真がなくなっているようだ。メノムアーチェがどうなったのかは、これではわからないな。ランケン、スルヴァドウクの冬の歌を知っているかい」

私は知らないと答えた。

「〈夢の街〉は自ら消えた、自らの夢のために、夢の中に消えた、と歌っているんだ」

「それだけでは、謎めいているとしか言いようがないね」

「その通りだ。トトロイズ子爵は大地震が起こってサンジェリイ沖の海底に沈んだという説を唱えた。〈ドランの尾〉の先の海だ。ジクムは元々はメノムアーチェの民を悼むために建てられた塔だったという説だ」

ルクセン岬の突端の黒い廃塔には、随分昔に上ったことがあったが、そんな云われがあるとは知らなかった。

「トトロイズ子爵がスプルナーの死霊を呼び出したというのは、恐らくはその自説を確かめたかったんだ」

「スプルナー大先生の霊に尋ねてかい」

「そうさ。メッセリン朝の偉大な史学者の霊なら、きつと何か知っていると考えたのさ」

ジェリーフォルは真顔で答えた。百年前のあまり評判の良くない素人学者が八百年前の伝説の大学者の霊を呼びだして、三千年前の〈幻の都〉について、知識を請う。随分と臆げな話だった。

「私もトトロイズ子爵に做ってみようかと思うんだ」

宝物の本を紙包みにしまいながら、ジェリーフォルは言った。

「君は口寄せもやるのかい」

小太りの男は杯に残っていた葡萄酒を機嫌よく飲み干した。

「いやいや、私は隠秘学者じゃないからね。そんなことはできないよ。実は信用できる霊媒師を見つけたんだ。この本を手に入れたのも、彼女の導きの賜物さ」

信用できる霊媒師、口寄せ、巫女、死霊使い、そういったものが、そう容易く見つかるとはまったく思えなかったが、好古の士の表情は明るかった。

「トリプロ街か」

「いや、違うんだ。〈手品師の広場〉に近頃やつてきた旅の巫女だ。東部から、ヴァルマントのあたりから、ずっと旅をして来たそうさ。気紛れで天幕に入ってみたんだが、探し物があの本屋で見つかるの見事に言い当てた」

私は酒杯の金色の酒を見て、少しだけ考えてから、ジェリーフォルにご注進することにした。

「君の幸運に水を差すつもりはないがね、旅の巫女という輩にはいろいろな女がいる。稀な力、何かを知る力あるいは深い知恵を持っている者もいるかもしれない。だが、どうとでも取れることや客の喜びそうなことを言ったり、逆に不安を煽るようなお告げをして、金を絞り取るような者もいる。色仕掛けに長けた者もいる。戦で間諜のようなことをする者さえいる」

ジェリーフォルは私の苦言にも笑みを消したりはしなかった。

「ああ、ランケン、そういうことは私も知っているさ。口寄せは床の中でしかしないという巫女だっているんだろう。だが、ノウウオンは本物さ。ちゃんとした霊媒師だ」

彼はノウウオンとかいう巫女への信頼の論拠は示さなかった。

「そうかい。それならいいんだが」

男は丸い眼鏡を持ち上げて、少しだけ訝しげな顔をした。

「ふむ、君は魔道探偵と言われているけれども、そうしたことについては懷疑主義者なんだね」

「そうしたこと、そうしたものたちとかかわるには、疑り深くないといけないのさ。そうでないと命を落とすことがあるからね」

ジェリーフォルは曖昧な仕草で首肯した。私の忠告をさほど真剣に受け止めたわけではないようだった。

「そうだな、では、明日、私と一緒にノウウオンの天幕に行ってみないか。君の眼力で彼女を見定めてみるかい」

私は余分な事に首を突っ込んでしまったことを知ったが、もはや後の祭りだった。

「失望しても僕を怨んだりしないでくれよ」

「失望なんてしないさ。君に得難い経験をさせてあげられるはずさ」

ジェリーフォルは少し嬉しそうな面持ちで笑った。新しい玩具を見せびらかしたい子どものようにも見えた。

翌日、私は裸体画とその銅版をラグラン大通りの商家に届けて、報酬を受け取った。帰ろうとすると、中庭で呆けたように花を見ている娘の姿がちらりと見えた。美しい娘だったが、顔色が悪く目には隈が出来ていた。何か悪い薬でもやっているのかもしれない。遠からず、またろくでもないことにかかわって、人生を台無しにするのかもしれない。

巫女との会見が荒事になるとは思わなかったが、私はファバーン剣を帯びてきた。古の魔剣は、ほとんどの魔力を失ってはいたが、妖しの力を感じて持ち主に伝える力があつた。

約束の夕刻に〈手品師の広場〉についた。不規則な形の石畳の広場にはたくさん小さな天幕や屋台が並び、手品師や占い師、大道芸人が手妻を見せてはささやかな稼ぎを手にしていた。

ジェリーフォルが小脇に『翠緑の書』が入っているらしい紙包みを抱えて、手を振った。

「やあ、それが噂に聞く魔剣だね。それで巫女を退治するのは勘弁してくれよ」

「魔物退治の英雄を生業にしているわけじゃないさ」

私は少しだけ鞘から剣を引き抜いて見せた。鉛色の刀身に彫られた角張った太古の神秘文字は鈍い緑色に沈んでいた。

「この剣は魔道の力を感じ取って伝える力がある。この文字が燐光を発し、掌にもある感じが伝わる」

ジェリーフォルは剣に顔を近づけて、繁々と神秘文字を見つめた。

「これはどこの国の文字だい？ 書法には疎くてね」

「ファバーン文字だ」

「おお！ 〈大いなる厄災〉で海中に没したという西の大洋の果ての国か！ そんなものを腰に帯びている君が、〈夢の街〉の实在を疑うとは！ 奇妙なものだ」

ジェリーフォルの言うことには一理あつた。私は苦笑いして剣を鞘に戻した。

ノウウオンという巫女の小さな天幕は広場の東側の隅っこにあつた。色褪せた黄色い布地が青や赤、緑の絵文字とも模様ともつかないもので縁取られている。入り口には縦長の錦の織物がかかり、どうやら「口寄せ、神降ろし」という文字が織り込まれているのがわかつた。

「入るよ」

ジェリーフォルは一声掛けて、入り口の垂れ幕をめくった。天幕の中は赤い色硝子の火屋のついた洋灯で照らされていた。赤や桃色の敷物が敷き詰められ、右手には木で作られた小振りの祭壇のようなものがある。祭壇には何本もの蝋燭が点り、石や木の枝、枯れた花束、猫か何かの頭蓋骨、干酒びた猿の手、浮き彫りつきの銀の器、ひびの入った手鏡、蛙に似た何

ものかの彫像、色取り取りの数珠、そんなものが並べられていた。奥には紗幕で覆われた寝床がある。

巫女は祭壇の反対側で、銅の香炉に火を点けていた。淡い青灰色の服は裾が擦り切れ、金の腰帯も大分くたびれて見えた。背中まである黒い髪は艶がなく解れて、一筋二筋白いものが交じっている。黒い瞳には澱んだ陰が見え、やつれた表情をしていた。

それでも、彼女は美しかった。細面の少し顎の尖った顔立ちで彫りが深い。人を惑わす妖女の彫像がそのまま動いているかのように見えた。只の顔形の美しさとは異なる、人を魅了する何か、その疲れた姿から未だ後光のように発せられていた。

「やあ、ノウウオン、今日はもう一人お客を連れてきたよ。友人のスナブ・ランケンだ。君は知らないかもしれないが、サンジェリイでは知られた探偵だ。その、何というか……」

女が後を引き継いだ。

「あやかしを探つては当代一という男だね。知っているさ。今日はこの私がかさま巫女かどうか、探りに来たというわけだね」

旅の巫女の声はしわがれて老婆のようだった。渴いた唇が歪んで、皮肉に満ちた笑いが浮かんだ。

「いや、ノウウオン、そんなつもりじゃないんだ。ただ、ランケンもメノムアーチェや古の事々に興味を持っている。君の口寄せの術の凄さを知ってもらいたいと思つてね」

巫女はほとんど見えない薄い眉を持ち上げて私を見た。玉座の上から臣下を見下ろす女王のようだった。

「そう。それなら、私のことをよく見ていることだね。断つておくけれど、見物も只というわけにはいかないよ。この人と同じだけの見料を戴くわ」

ジェリーフォルは少し困ったような顔をしたが、私は目顔で構わないと彼に伝えた。商家の主は、決まりの額に少し色をつけてくれていた。

「今日は懐が少し暖かいからね。巫女様の如何なご神託も聞く耳が備わっているのさ」

ノウウオンは先に見料を戴くと云った。私とジェリーフォルはそれなりの金額を支払った。旅の巫女の相場よりはいささか多めの額に思えた。ジェリーフォルが『翠緑の書』を祭壇と向き合つて座つた巫女の前に置いた。

「君のお告げ通り、私はこの本を手に入れることが出来た。猫が僥倖をもたらす、まさにその通りだったよ。いや、初めは〈猫の耳朵〉なんておかしな店に入つてしまつたがね」

そう言つて丸眼鏡の男は顔を赤らめた。春本屋か何かだったのだろうか。

ノウウオンは目の前の古書にそつと手を置いたが、頁をめくろうとはしなかつた。ただ、目をつぶつて静かに黄ばんだ紙の束を撫でていた。

「昨夜ほとんど徹夜で読んでみたんだが、随分と欠落部分が多いんだ。美しい〈夢の街〉の様子を描いた部分は概ね無事なんだが、メノムアーチェの成り立ちや、百年王とその巫女のこと、街の滅亡については、ほとんど頁が欠けているか痛んでいるかしてわからない」

巫女はまだ入神しているわけでもないだろうに、目を閉じたまま本の様子を理解したかのように男の言葉に首肯した。口元はすでに何かの呪文を唱え始まつているのだろうか、小さく動き続けている。

「そこで、ノウウオン、君に今日はスプルナー教授の霊を呼びだしてもらいたいんだ。スプルナーは八百年前、メッセリン朝の偉大な史学者だ。おそらくはこの『翠緑の書』についても相当な知見を持っているに違いない」

ジェリーフォルは黄土色の外套の隠しから、一冊の古びた本を取り出した。私もその本は大学時代に読んだ事があった。『百の災禍と一なる光明』、スプルナーが晩年に残した史書だが、比較的新しい―百年ほど前の―版だろう。

好古の士はスプルナー先生の本の扉に貼り付けられている長い顎髭を蓄えた仏頂面の老人の銅版画を指し示した。それからもう一つ隠しから持ち出したものがあつた。

「これはスプルナー教授の愛用品だという墨壺なんだ」

それは真つ黒い卵形の代物で、上の方四分の一くらいが開いている。石を削り出したものか、陶器なのか、あるいは硝子製なのか、こびりついた黒い墨でわからなかつた。そもそも八百年前のスプルナー先生の墨壺が残っているのか、私は知らなかつた。

ジェリーフォルは恭しい仕草で本と墨壺を巫女の前に置いた。

女はずつと目を閉じたまま、スプルナーの遺物を見もしなかつた。それどころから、本も墨壺も、苛立たしげな仕草で祭壇の前から払い除けた。ジェリーフォルは呆氣にとられたが、すぐに本と墨壺を拾い集めた。

「そうか、君にはもう、何かが降りているんだ」

男はその自分の言葉で納得したかのように古本と遺物を懐にしまい込んだ。

巫女は陶然とした表情で身をのけぞらし、震える手で宙に何かをつかむような、誰かを抱きすくめるかのような仕草をした。渴いた唇に不思議と色艶がのり、くすんだ肌に艶めかしい張りが戻つたように見えた。祭壇の前で身をくねらせるノウウオンはひどく扇情的に見えた。

吐息とともに彼女は声を吐き出した。喉の奥で唸るようなむせぶような音を発し、言葉の塊を吐き出すように見えた。

「どこ？ どこはどこなの？ 暗いわ。大勢の人が……ああ、この街は……メノムアーチェではない……ああ、あの方はどこ？ ああ、わからな……」

ジェリーフォルは興奮に顔を赤らめながらも、何とか落ち着いた声で質問しようと努力していた。握りしめた両の拳が震えていた。

「君は……君は誰だ？ どこはサンジェリイという都だ。君はメノムアー

チェの住人なのか？」

旅の巫女は苦しげに顔を歪め、また吐き出すように言葉を口にした。

「サンジェリイ？ わからない、私はメノムアーチェの巫女、〈緑の巫女〉ツエーヌ……ああ、わからない、あの方はどこに行つたの？」

「メノムアーチェの巫女！ おお、何ということだ！ 三千年前の、〈夢の街〉の、巫女その人の霊を呼び起こすとは！」

ジェリーフォルの大きな声を耳にしたノウウオン「いや、古の都の巫女ツエーヌというべきなのか」は、一瞬身を固くして、瞼を閉じたまま男の方を見た。そう、目は閉じていたが、強い視線が彼女の双眼からジェリーフォルに投じられたのは明らかだつた。

「おお、あなたは！ あなたはここにいたのね！ ああ、あなたはやっぱり帰つてきてくれたのね！」

女は目を閉じたまま小太りの男に抱きついて身を預けた。ジェリーフォルは女を抱き留める間もなく、後ろに倒れた。腕か足がぶつかったのか、派手な音をたてて祭壇が倒れた。飾られていたたくさんの祭器や呪物があちこちに放り出され、倒れた蝋燭が絨毯や座布団に燃え移りそうになつた。

私は慌てて火を消したが、ジェリーフォルは旅の巫女に押し倒されたまま彼女を抱きしめていた。ノウウオンは既に正体がないようだつた。

私は巫女の体を引き起こし、天幕の柱に寄りかからせた。ジェリーフォルも身を起こし、落ち着かない声を出した。

「ランケン、これは何だろう！ ああ、こんなことが本当に起こるなんて！ メノムアーチェの巫女と私は触れあつたんだ！ そうだ、剣はどうした？ 魔剣は？」

私はファバーン剣を鞘から少し抜いて見せた。古代の神秘文字は暗く沈んだままだつた。

「どうしたことだ。こんなに明らかに靈妙な出来事が起こっているの

に？」

「もう、古い霊は去ったんだろう」

「古の巫女が話している時はどうだった？」

「刀身を見ている暇はなかったが、何かの感覚はあった。はつきりしたことはわからない。この剣の力はそんなものだ」

私は正直に答えたが、ジェリーフォルはいささか納得がいかないような顔つきだった。彼が何か言う前に、霊媒師が呻き声を漏らした。

「ノウウオン、覚えているかい？ 今、大変なことが起こったんだ」

旅の巫女は目を開いた。先刻までの不可思議な輝きは失われ、くたびれた顔の、だが美しい女に戻っていた。彼女は静かに首を横に振った。

「口寄せの最中のことは、いつも記憶がぼんやりとしている。はつきりと思いつことはできない。どこか、果てしなく遠い暗闇の縁から……何か……」

そこまで言つてノウウオンは肩を震わせて口を閉ざした。黒い瞳に虚ろな影が差し、ひどく咳き込んだが、言葉を吐き出すわけではなかった。ジェリーフォルは水を注いで差し出したり、背中をさすったり、甲斐甲斐しく介抱した。私は倒れた祭壇を元に戻し、散らばった呪物を拾い集めた。

しばらくしてノウウオンは落ち着きを取り戻し、ジェリーフォルが起こったことを説明したが、彼女がそれ以上のことを明白に語れるわけではなかった。

ノウウオンが、ひどく疲れたので今日はもう店仕舞いだと言うので、私たちは彼女の天幕を辞し、〈澄める水〉に向かった。店は少し混み始めていた。ジェリーフォルは珍しくシエアを注文し、銅杯の中の泡立つ酒を一気に喉に流し込んだ。私は歪んだ硝子の杯に注がれたダイコンを舐めるように飲んだ。

「ランケン、この出来事をどう思う？ 三千年前の〈幻の都〉の霊が降りて

きたんだ！ 〈緑の巫女〉 ツエーヌと私は言葉を交わしたんだ！」

ジェリーフォルの高まった気持ちはまだ収まりそうになかった。

「ああ、いや、何かは起こったんだろう。僕もそう思うよ」

好古の士は私の答えには満足しなかったようだった。

「君はどこまでも懐疑主義者なんだね。私はノウウオンに巫女の名前のことは話していない。彼女は『翠緑の書』を開きもせずに、〈緑の巫女〉の霊を呼び出した！ しかも自らツエーヌと名乗ったんだ！ 驚くべきことじゃないか！」

私は答え難い答えを返した。

「ノウウオンが元々メノムアーチエについて何某かの知識を持っていたということは考えられる。旅の巫女は様々な土地を歩いて様々なことを知る。〈緑の巫女〉の名前についても、知る機会があったかもしれない」

ジェリーフォルは難しい顔をしてシエアを飲み干し、金冠印の葡萄酒を持ってくるように給仕の女に言った。少しばかり高級な酒だ。

「ふむ、探偵というのは疑うのが商売だろうからね、仕方ないか。だがね、私は信じる、ノウウオンは〈夢の街〉の巫女の霊と通じたんだと！ いいかい、ランケン、私は感じたんだ。抱き留めたノウウオンの体の重みの中に何かを。それはきつと天啓と言つていいかもしれない。いいかい、これは言葉にはできない。彼女の中には古の〈緑の巫女〉が宿っていたんだ。言葉で現せないものが、私の体に雷のように突き抜けたんだ」

彼に反論する言葉はあまりなかった。信じると言っているものを、それは違ふとただ言つてもほとんど意味はない。女の肉の重みの中にはすべての真実がある。すべての間違いも。

「彼女の最後の台詞はどう考えるんだ。まるで三千年前の彼女は君のことを知っているみたいな口ぶりだったか」

ジェリーフォルは口元まで運んでいた葡萄酒の杯を一旦卓子に戻した。今度は彼が少し困ったような顔をした。

「それがわからない。今日の出来事で一番わからないことだ。〈緑の巫女〉の霊は錯乱していたのかもしれない。いきなり三千年後の世界の呼び出されたんだ。何もかもが未知のことばかりで、靈妙な力を持つ巫女といえ、困惑もするだろう。私を誰かと間違えたのかもしれない。次に彼女と会えた時によく尋ねてみるよ。今日は私も驚いているばかりで、落ち着いて質問をすることもできなかった。きつとノウウオンも次はもつと冷静に対処できるだろう」

ノウウオンの口寄せをいかさまだと言いつけることはできなかった。だが、ジェリーフォルのように自分が信じたい真実に引き寄せて考えることもできなかった。そもそも、私には信じたい真実などなかった。結局、私には何も言うべきことがなかった。

ジェリーフォルは葡萄酒を飲み干し、私はディコンの杯を空けて、店を出た。

私は一日考えた末にもう一度〈手品師の広場〉を訪れた。陽は傾き始めていたが、まだ人は少ない。ジェリーフォルも図書館で目録の間違いで探している頃だろう。

旅の巫女は自分の天幕の前で白っぽい小さな葉をすり鉢に入れて砕いていた。一風変わった甘ったるい匂いがした。

「コーデンクラスか。珍しい媚薬だね」

陽の光の下で見ると、巫女はよりみすばらしく見えた。青灰色の服は元は青かったものが色褪せてしまったようだった。目尻や口元には小じわが目立った。

「物知りなのはいいがね、商売の邪魔をしてもらっちゃ困るよ」

ノウウオンは不機嫌そうに私の顔を見上げた。

「それで初心な本の虫を誑かすつもりかい」

「私は真つ当な商売をしているんだよ。探偵だかんだか知らないが、余計なお世話は止めてもらおうか」

「君の口寄せがいかさまだと言ってるわけじゃない。いや、君は本当に何かの力を持つているんだろう。一昨日も―ツエーナとかいう大昔の巫女の霊かどうかはともかく―何かが起こっていたのかもしれない」

「何が言いたいんだい。私は仕事の準備で忙しいんだ」

女は砕いた葉をすり鉢から黒い粉末が入っている別の椀に入れ替えた。混ぜ合わせると桃色がかかった灰色の粉になった。指先でほんの少しだけ舐めてみて、彼女はまずまずといった顔つきで首肯した。

「試してみるかい。サレームの魔女たちが男を生け贄にするのに使うという媚薬さ。薄めてはあるから大丈夫さ」

ノウウオンは口の端に大きなしわを寄せて、にやりと笑った。天幕の外で見ても、その笑いは妙に艶っぽかった。

「サレームの魔女たちは男嫌いかもしれないが、そんな野蛮なことにはするまい。媚薬ぐらいいは使うかも知れんが。君は生け贄も使うのかね。そういう死霊使いもいるだろう。命を奪って死者の霊を呼び出すとはおかしな話だ」

巫女は天幕の入り口の布をまくり上げた。

「中で落ち着いて話をするかね」

「遠慮しておくよ。その中は君の世界だろう。魔法円は描いてなくても境界が張られているのは目に見えている。君が支配して男を意のままにできる世界だ」

女はむつとした様子を隠そうともしなかった。

「ふん、可愛げのない男だね。私の誘いに乗る度胸もないのか」

「随分痛い目にあっただね。君には特別な魅力があるとは思うが、つい代償を考えてしまうのさ。でもジェリーフォルはそんなことは考えないだろう。あの男を危険な世界に連れ込むのはよせ」

「これはまた、情け深い男でもあるんだね、あんたは。いいかい、私たちのような商売の者が、客の望むような言葉を口にするのは、別段不思議なことじゃない。あからさまでは興醒めだが、謎めいた言葉で、遠回しに、場合によっては望みとは反対の言葉を使って、夢が適うという夢を適えてやるのさ。それが何が悪い」

「君の商売そのものにけちをつけるつもりはない。僕が言いたいのは、君がもし、本当に〈大いなる厄災〉の頃の、古の霊を呼び出しているのなら、それには危険が伴うということだ。その危険に僕の友人を巻き込むなということだ」

「いいかい、私はあの男に頼まれて得体の知れない古の霊の口寄せをしたんだよ。私が誑かしたわけじゃない。あんたの言いたいことはわかるさ。〈大いなる厄災〉にまで遡る古怪な霊ならば、何か恐ろしいことが起こっても不思議はない。でもね、いいかい、それをするのが私の仕事なんだ。三千年前の巫女の霊が何を為そうとしているのかなんて、わかるわけがないさ。けれども、その霊を降ろしてその言葉を吐き出すのが私の生業なんだ。誰にも邪魔はさせないよ！」

ノウウオンは私が思っていたよりもずっと巫女としての矜持を持っているようだった。

「あの男は〈夢の街〉へ行きたいんだ。ここではないどこかへ旅立ちたいんだ。だから、私は〈夢の街〉の夢を見せてやるのさ」

ジェリーフォルは確かにメノムアーチェの伝説にのめり込んでいたが、それが道楽の範疇を越えたものかどうかは、私には判断しかねた。私は彼について何も知らなかった。貧しい暮らしをしているように見えなかったが、家族がいるのか、仕事に満足しているのか、そういった彼の人生について、知ろうともしていなかった。

「あの男を友と思っているのなら、忠告は私にではなくあの男にするがいい。私は私の意でしか動かない。お前さんもご同様だろう」

そう断言する旅の巫女は、天幕の中での魔法が効いている時のように美しく見えた。知らぬ間に媚薬を効かされたのだろうか。

私はもう一度だけ旅の巫女に質問した。

「君は本当にメノムアーチェの巫女の霊を呼び降ろしたのか」

黒い双眸が私を見据えた。

「誰かを探している女の霊さ。暗くて遠いところからやって来た。私が覚えているのはそれだけさ」

それ以上、互いに何も言うことがないのはわかっていった。私は退散することにした。

その後しばらく、ボニージュ街にも〈手品師の広場〉にも行く機会はなかった。私は南の大門近くの商人が、怪しげな仲買人に奪われたという秘密の手紙を取り戻す仕事をしていた。秘密の手紙には取引上の密約が書かれていると商人は言った。

手紙は回り回って、ある故買屋が手に入れた。故買屋は表の商売としてボニージュ街に古道具屋も開いていた。故買屋は金を受け取り私は手紙を受け取ったが、裏口に与太者が二人待ち受けていた。一人は鼻がつぶれて、一人はどこかの骨が折れたかもしれないが、自業自得というものだ。

騒ぎの間に封筒が破れて中身が飛び出した。薄桃色の便箋には愛人と密約が認めてあった。

私は表通りに出て、依頼主の店に向かおうとした。古道具屋の店先にジェリーフォルがいた。いつもの黄土色の外套を着て、灰色の手袋をして、丸眼鏡の中から店先に置かれた白鐵の杯を見ていた。

私が声をかけると、どうしてここにいるんだ、と言いたげな顔をした。あまり、嬉しげには見えなかった。

「今日は何を物色しているんだい」

私の問いには、はっきりしない答えが返ってきた。

「うむ、特に何をつてこともないんだ。ちよつと古くて洒落た杯だと思つてね」

「この店はやめた方がいい。主は故買屋だ。やくざ者とも付き合いがあつる。それも恐らくは盗品だ」

ジェリーフォルはしかめ面をして器を見て、店頭に戻した。合わない間に幾らか痩せたように見えた。

ジェリーフォルはあまり乗り気ではないようだったが、私は話があると云つて〈澄める水〉に入つた。私たちはデイコンと葡萄酒をそれぞれ注文した。ジェリーフォルは約束があるからあまり長居はできないと言つた。

「〈手品師の広場〉に用事かい」

「いや、そういうわけじゃないんだ。ちよつと野暮用でね」

丸眼鏡の男はぎこちない笑いを浮かべた。

「そうかい。あの旅の巫女のところにはもう行つてないのか」

ジェリーフォルは私の問いには答えず、葡萄酒をすすつた。

「君はあの時一緒にいたのに、まだノウウオンの口寄せに疑問を持つているのかい」

いささか不機嫌そうな口調だつた。

「そういうわけじゃない。むしろ、あの時、何かが起こつたと思つている。あの巫女は何かの力を持つているだろう。だから気になるんだ。もし、本当に〈大いなる厄災〉の頃の何かの霊が出現したのだとしたら……」

「何と素晴らしいことじゃないか」

ジェリーフォルは私の言葉を遮つた。

「〈夢の街〉の巫女ツエーナが現出したんだ。實在さえ疑われていた古の都の、その神聖な巫女と通じることができたんだ。こんな素晴らしいことがあるかい？ 三千年の時を超えて、〈夢の街〉の夢の女と相まみえることができたんだ！ ランケン、これは奇跡だ！ 君は一体何が心配だと言うん

だ」

ジェリーフォルは次の一口で葡萄酒を飲み干した。

「ランケン、私は今、夢見心地なのさ。〈夢の街〉メノムアーチェの巫女と、身も心も繋がつてゐる。三千年という途方もない時間も、私と彼女にとつては何の障壁にもならないんだ！ わかるかい！」

酒のせいかな、ジェリーフォルの顔は紅潮してゐた。少し痩せただけでなく、目の回りが不健康に落ちくぼんでゐるようにも見えた。

「ノウウオンと寝ているのか」

ジェリーフォルは母親に自慰を見咎められた子どものように、よくわからない言い訳じみた台詞を並べた。シュヌベル大学の時計塔から、歪んだ破れ鐘の音が聞こえてきた。いつになつたら、あの機械時計を新調するのだろうか。

「そろそろ行かなくちゃいけないんだ」

ジェリーフォルは立ち上がつて黄色い外套に袖を通した。

「あの女はやめておけ」

「あの女？ 君は一体誰のことを言つてるんだ」

苛立つた様子で彼は折半した勘定を卓子の上に置いた。そう、あの女とは誰のことだろうか。いささか臺の立つた旅の巫女か、三千年前の王の巫女か。

「僕にもよくわからないね。だが、今の女も昔の女も、多分、危険だ」

何の説得力もない台詞だつた。世界の女はすべて危険だと言つてゐるのに等しい。ジェリーフォルは、頭を振つて店を出ていった。

私はデイコンをもう一杯飲んでから、デリン灯と店々の灯が交錯する街をへ手品師の広場まで歩いた。ノウウオンの天幕はもうなかった。隣で手札占いをやつてゐる男に尋ねたが、数日前にここを引き払つてどこかに行つたことしかわからなかつた。

女にも男にも忠告はした。はっきりとした危険が差し迫つてゐるわけ

ではなかった。ジェリーフォルは少しばかり女で痛い目にあうのかもしれない。〈夢の街〉メノムアーチェの実在の証を立てたとして史学に名を残すのかもしれない。素人学者の戯言として、嘲笑を浴びるのかもしれない。旅の巫女はいい伴侶を見つけたのかもしれない。いい伴侶とは当座の金蔓なのかもしれない。古の巫女と一体となり、靈妙な力を得るのかもしれない。何も起こらないのかもしれない。

図書館に向いてジェリーフォルの家はどこか尋ねようかとも思ったが、もう遅番の館員が施錠している時間だった。依頼人を訪ねるのも明日にして、私は家路をたどった。

秘密の手紙の一件は、少しばかり面倒なことになった。クーリカフ街の探偵局兼我が家に返ると、ちんぴらが二人と用心棒らしい軍人崩れが待ち受けていた。ちんぴら二人は叩きのめしたが、用心棒は食い下がってきたので、奴の右腕が路上に転がることになってしまった。騒ぎを聞きつけた警邏隊がやってきた。

近くの詰所に一晚泊められて根掘り葉掘り聞かれた上、尾行を撒いて南の大門の商人の屋敷に行くと、愛人が押しかけていて奥方と大喧嘩になっていた。愛人はあの春画の娘だった。呂律が回らない口調で何か叫んでいた。奥方の方が短刀を持ち出したので、騒ぎは大きくなり、仕事熱心な警邏隊が、またやって来た。私は二日続けて詰所に引っぱられる羽目になった。

四日ほどして商人が事情を説明してくれたので、ようやく放免された。長くやっているが、私は旅の巫女ほど、この仕事に誇りを持ってそうになかった。

昼過ぎに家に帰ると扉に封筒が挟んであった。ジェリーフォルからの手紙だった。雨に濡れて封が切り辛かった。雨は昨日の朝から降り続い

ていた。

今宵、〈夢の街〉に旅立つと書いてあった。短い手紙で余分なことは何も書いてなかった。私と〈澄める水〉で飲んだのは楽しかったということ、この街、この世界に未練はないということ、部屋と蔵書と家財道具、蓄えの処分についての依頼が書かれていた。

遺産（と言っているのだろうか）は、ノウウオンとフランジースコに住む伯母、それにシュヌベル大学図書館に贈るという「遺言」があった。私にも幾許か残すとも書いてあった。

私は彼の「遺産」の額に驚いた。只の図書館員が遺せる額ではなかった。「遺言」に記されたやけに長い彼の正式な名前を見ると、さる古くからの貴族に連なる名が挟み込まれていた。

手紙の日付は昨日だった。私は冷たい小雨の中、ラグラン大通りまで走り、辻馬車を拾った。馬車を待たせて、シュヌベル大学の図書館に駆け込み、ジェリーフォルの住処を聞いた。昨日から仕事に来ていないと、受付の女は不機嫌そうに言った。

ジェリーフォルは大学の裏手、むささび坂を下ったところに住んでいた。妙に長ひよろい古びた煉瓦の建物は、倉庫か何かを改装した二階建ての長屋だった。彼の部屋は二階の一番奥にあった。板張りの長い廊下は歩くと軋み、日が差さないので寒かった。廊下には塵が散らばり、どこかの部屋から酔っ払いのものらしき調子の外れた歌が聞こえてきた。

扉には何度も色を塗り替えた跡があった。閉まっていたが、鍵はかかっていなかった。部屋の中は薄暗く、香の匂いがした。ノウウオンの天幕で嗅いだことのある匂いだ。部屋は小奇麗にきれいだが、三方の壁が書棚で埋まっており、床の上にもいくつもの本の山があった。突き当たりの壁には窓があったが、厚い窓掛けで粗方の光は遮られていた。

窓の下には低い寝台があり、その脇には旅の巫女の天幕にあった小さな祭壇が置かれ、何本もの蠟燭が点されていた。香炉から細い煙も立ち上つ

ている。

ノウウオンはこちらに背を向けて寝台の上に屈みこみ、小声で何かの呪文を唱えながら右手をゆつくりと動かしていた。彼女の手にある鈍い銀色の杯は、ジェリーフォルがポニージュ街の古道具屋で手にしていたものだろうか。

白鐵の杯からは赤いものが滴り落ちていた。彼女はそれを寝台の上の一イート(約三十センチ)ほどの白木の箱の中に注いでいた。「何をしているんだ」

ノウウオンは私の声に振り返ることもせず、器に残っていた最後の一滴を箱の中に注いだ。それから、低い声でもう一言呪文らしきものをつぶやくと、さも愛おしそうに木箱の上を撫でる仕草をした。

私は寝台に近づき、そこにあるものに目をやった。真っ更な白い敷布の上には、木箱と『翠緑の書』が置かれていた。敷布の真ん中には誰かが寝ていた窪みとしわが薄く残っていた。

白木の箱の中にジェリーフォルがいた。身の丈一イートほどに縮んではいたが、間違いなくジェリーフォルだった。満足げな面持ちで目を閉じ、薄黄色の布にくるまれて横たわっていた。箱の中には、まだ注がれたもの―おそらくは血―が少し残っていたが、私の目の前で、それは男の小さくなった体に吸い込まれるように消えていった。黄色い布にも木箱にも何の染みも残らなかった。

「行ってしまったよ」

ノウウオンが囁いた声で言った。

「どこへ行ったと言うんだ？ ジェリーフォルに何をした？」

「あんたには手紙を書いたと言っていたがね。〈夢の街〉へ旅立ったんだよ。メノムアーチェへ、遠い昔の街へ魂の旅に出たんだ」

私はほとんど自分でも気づかぬままにファバーン剣を抜いていた。刀身には太古の神秘文字が青緑色に浮かび上がっていた。掌には奇妙なし

びれるような感覚が伝わってくる。だが、剣を抜いたとて斬る相手がいるわけではなかった。

「私を斬るかね。斬ってもあの男は帰っては来ないよ。あの男は自分の意志で〈夢の街〉へ行ったんだよ。深い霧の彼方の、古の街、古の巫女に心惹かれて行ってしまったんだよ」

「魂だけが、靈魂だけが、三千年前に飛んでいったというのか。それでこの人形のような抜け殻が残ったと？」

ノウウオンはうなずき、小さくなった男を撫でるように指先を動かした。

「あんたもイルバロズの秘法については知らないようだね。元々はアライゾの乾いた台地の呪術師の秘術さ。その昔、〈大いなる厄災〉よりももっと昔、遠い星辰の彼方の女に焦がれた男が、この秘法で魂を肉体から解き放ち、女のもとへ闇と冷気の中を飛んで行った、そういう秘法さ」

「ツエーヌとかいう〈夢の街〉の巫女に惹かれて、星辰の彼方どころか、時間の彼方へ飛んで行ったというのか」

「私は止めたんだよ。行かないでほしいと言ったのさ。でも、あの男は行ってしまった」

ノウウオンは箱を手に取り、中の男をじつと見た。それから箱に蓋をして革紐でしっかりと縛りつけた。私は彼女が泣いていることに気がついた。

「いつか、帰ってくることもあるのか」

「そんなことはわからないさ」

旅の巫女はそう言って、香炉や蝋燭を消して、祭壇を片づけ始めた。祭壇には背負い紐が付いていて持ち歩けるようになっていた。ノウウオンは祭壇を背負い、肩から提げた布袋に木箱を入れ、油紙で包んだ『翠緑の書』を手に持ち、ジェリーフォルの部屋を出て行った。

私は為す術もなく、小雨の中を去って行く巫女の後ろ姿を見送った。魔

劍の神秘文字はいつの間にか光をなくし、鈍色の刀身の中に沈み込んでいた。

ジェリーフォルの「遺言」の通りに私は彼の「遺産」を処分した。「遺言」は正式な書類の形式に則っており、「長い旅に出るので」という理由付けが為され、署名も本物と認められた。役人は疑り深い目つきで私を見る以上のことはできなかった。

一月ほどたった冷たい雨の降る夜、私は暖炉に火を起こし、青硝子の酒杯からデイコンをすすっていた。ジェリーフォルの「遺産」で買った少しばかり値の張る酒は、香り高くまろやかな舌触りだったが、私はもう少し荒い味の方が好みだった。薪が湿っていたのか、火の勢いが弱く、冷気が家の中に染み込んでくるように感じられた。朝には雪になっっているかもしれない。

扉を叩く音が聞こえたような気がした。そのままにして、もう一口デイコンを飲むと、今度はもう少しはつきりと音がした。

杯を置き、扉を開けた。家の中からの明かりに雨が白糸のように光って見えた。扉の外には誰もいなかった。四方を見回したが、走り去る人影も見えなかった。細かい雨粒が緩やかに舞っているだけだった。

足下に一イートに満たないくらいの四角い包みが置かれていた。薄茶色の油紙で包まれ紐で括られている。宛名も差出人の名もなかった。

包みを解くと一冊の本が現れた。緑色に染められた革で装丁されており、表紙には金の箔押しで『翠緑の書』という書名があった。その下には少し小さめの文字で筆者の名が記されていた。一風変わった書体だがウオモレン（共通語）には間違いない、タンプトン・メノム・ジェリーフォルと読めた。「遺言」に書かれていたジェリーフォルの正式な長い名前には、頭にタンプトンと入っていたはずだ。

ばらばらと頁をめくってみると、木版らしい印刷で〈夢の街〉メノムアーチェに関することが書き連ねてあった。ジェリーフォルがボニージュ街で手に入れたあの古びた本と同一のものに違いなかったが、この本は真新しいものにしか見えなかった。

扉の裏側に、ごく控えめに本の発行年と思しき記載があった。大災紀二百十六年という年号は何を意味しているのだろうか。昨日日本屋に並んだばかりのようなこの本は、三千年前、〈大いなる厄災〉から二百十六年後に出版されたということなのだろうか。版元や印刷元についての記載はどこにもなかった。

この本には〈夢の街〉メノムアーチェの勃興と繁栄、そして滅亡が、百年統治した王と〈緑の巫女〉ツエーメにまつわる事どもが、他ならぬジェリーフォル自らの筆により、すべて明らかにされているのだろうか。

私は本を閉じて、目も閉じた。瞼の裏に小太りの丸眼鏡の男の、少し子どもじみた笑顔が浮かんだ。そう、これは子どもじみた悪戯なのかもしれない。夢幻の街に取り憑かれた男の、自分をも巻き込んだ馬鹿げた悪戯なのかもしれない。縮んで木箱に納まったジェリーフォルが満ち足りた笑みを浮かべていたことを私は思い起こした。

私はもう一度本を手に取り、巻末の方の頁を開こうとした。〈夢の街〉メノムアーチェの滅びがそこには記されているのだろうか。古謡に歌われた謎のような消滅の子細が書かれているのだろうか。

その記述を読むことはできなかった。『翠緑の書』は私の手の中で、急激に朽ち始めた。美しい緑の表紙は色褪せた褐色となり、頁は端の方から黄色くなってぼろぼろに崩れていった。黒々としていた文字はかすれて朧になり、まともに判読することはできなくなった。

しばらくすると本の崩壊は止まった。ジェリーフォルがボニージュ街で手に入れたものと同じくらい朽ちて崩れたものが、私の手の中にはあった。巻末の方の頁はほとんどが薄茶色の屑の塊になっていた。

私はそれ以上崩れないように、そうつと、ジェリーフォルの三千年越しの労作を書棚に仕舞い込んだ。それから、机の上に残った乾いた紙の屑を集めて、暖炉に放り込んだ。ぱちぱちと金色の火花を散らして、それは消えた。

私は杯にデイコンを注ぎ足した。旅の巫女の目に浮かんだ涙のことが思い出された。彼女はあれで良かったのだろうか。古の巫女ツエーヌは彼女の中で自分自身と混交したものになっていたのだろうか。いつか、彼が戻る時があるとすれば、彼女のもとへ戻るのだろうか。あの箱に納められた体の中へ。私にはよくわからなかった。

旅立った男と旅の巫女のために、私は一人で酒杯を干した。